

平成25年台風18号における淀川水系の洪水調節 ー7ダム等の連携操作により壊滅的被害を回避ー 土木学会賞 技術賞（Iグループ） 受賞

平成25年台風18号による洪水時に、桂川下流部の堤防の決壊という最悪の事態を回避するために実施した、淀川水系7ダム等が連携した洪水調節操作（添付資料）が、土木技術の発展に顕著な貢献をなし、社会の発展に寄与したと認められ、土木学会賞の技術賞（Iグループ）を受賞いたしました。

【受賞機関】

国土交通省近畿地方整備局、淀川ダム統合管理事務所、琵琶湖河川事務所
（独）水資源機構関西支社、日吉ダム管理所、木津川ダム総合管理所、琵琶湖開発総合管理所



土木学会賞は、学会創立後6年目の1920（大正9）年に「土木賞」として創設されました。以来、大戦終了後の1945年から48年までの余儀ない中断はあるものの、80余年の伝統に基づく権威ある表彰制度です。

技術賞（Iグループ）：具体的なプロジェクトに関連して、土木技術の発展に顕著な貢献をなし、社会の発展に寄与したと認められる計画、設計、施工または維持管理等の画期的な個別技術。いわゆる「ハードウェア」のみならず、情報技術、マネジメント技術をはじめ、新しい制度の導入等の「ソフトウェア」についても対象とする。

平成25年台風18号における淀川水系の洪水調節 — 7ダム等の連携操作により壊滅的被害を回避 —



平成25年9月台風18号の豪雨により、淀川水系桂川下流部の鴨川合流点付近（京都市）の右岸堤防において、最大400mの区間で越水しました。

水防団・自衛隊による懸命な水防活動により土のう積みが行われ、桂川上流の日吉ダムでは、ダム容量を最大限活用して洪水を貯留する操作を行いました。宇治川においても、天ヶ瀬ダムの洪水調節と瀬田川洗堰の全閉操作を行い、さらに、木津川上流のダム群（布目ダム、高山ダム、室生ダム、青蓮寺ダム、比奈知ダム）も連携して桂川下流部の水位低下に努めました。これら、すべての施設を最大限に活用した洪水調節により、堤防の決壊という最悪の事態を回避することができました。

桂川下流部での堤防上の越水深が10～20cmであったため、水防活動による土のう積みで堤防決壊を防ぐことができましたが、仮に7ダムがなく、瀬田川洗堰が全開であれば、越水深はさらに数十cm高くなったと推定され、土のう積みも困難

であったと考えられます。

また、日吉ダムがなく、堤防が決壊したと仮定した計算では、約13,000世帯の浸水、約1.2兆円の被害が算定されます。

さらに、浸水被害を受けた嵐山付近においても、日吉ダムがない場合に比べ、水位を約50cm低下させ、浸水家屋を約6割低減させたと推定されます。

この洪水調節操作は、各ダム管理所、ダム統合管理事務所、近畿地方整備局、水資源機構関西支社が、緊密に連絡調整を行い、高度な技術力を発揮することによって、水系7ダム等の連携による前例のない操作を実施し、全国的にも極めて顕著なダムの効果を示したものであり、大災害を未然に防止した功績は大きいと高く評価され、技術賞に値するものとして認められました。



日吉ダムがなく、鴨川合流点付近において右岸側の堤防が決壊したと想定した場合の浸水状況

